竹千代賞

容器

西村奏太

座りたかった。
その『容器』の中では、僕は座れなかった。
完全に密閉され、継ぎ目もないこの空間の中に、僕は閉じ込められていたのだ。
僕はただ立っていた。
この容器の中には、僕の腰より少し上のあたりまで水が入っていた。真っ白な壁に、完全に透明な水は、まるで何も無いかのように感じられた。
しかし水は入っていた。
腰の辺りまでこの容器を埋めているこの水は、僕が座ることを許さなかった。椅子など無いから、自然体育座りになるが、それでは高さが少し足りない。あと5cm水位が低ければ座れるはずなのに、僕はただ立っていることしか出来なかった。
僕は寝ることも座ることも出来ず、ただ立っていたのだ。

いつからここにいるのかは、既に忘れてしまった。何かの罰としてこの水の部屋に閉じ込められているのか、それとも僕は産まれた時からここに居るのかもしれなかった。

足は既に痺れて、ほとんど動かせなかった。痛みすら無く、僕はただ疲れだけを感じていた。

足にかかる体重を減らすために、壁によりかかろうとしたこともあった。しかし、継ぎ目も、摩擦も無いその白い壁によりかかっても、かえって疲れるだけだった。

眠気は常に感じていた。立っている状態ではまともに眠ることは出来なかったのだ。薄い意識の中、ふらつきながらも、僕はただ立っていた。

ある時、僕は死のうと試みた。

しかし、それすら叶わなかった。適度な水位は、溺れようとした僕が無意識に息継ぎをするために充分だった。

僕はいつの間にか、死ぬことすら面倒に思えてきて、諦めてしまった。

空腹も、常にあった。それでも、僕は餓死しなかった。この水に不思議な何かが施されていたり、この空間では死者が出ないような何かがあったのかもしれないが、僕は知らなかった。

退屈だった。

ぼんやりとする以外にやることが無い。

ただ、僕は立っていた。